

自己愛がセルフ・コンパッションを介して謙虚に与える影響

— 健康な自己愛モデルの作成 —

東 畑 遥 海

現代の青年において、「エネルギーで外向的、自信家、自己本位、競争的、攻撃的であり、共感性に乏しい」（宮下, 1991）側面や、自己像が不安定である（小塩, 2001）という側面が指摘されており、これらの背景には、自己愛の人格傾向という人格特性に着目した研究が見受けられ（小西・大川・橋本, 2006）、暴力や犯罪、ひきこもりといった社会的問題と自己愛の関連が心理学的研究テーマとして重要性を高めている（川崎・児玉, 2010）。このように、自己愛の病理的な側面に着目した研究とは別に自己愛を一般に持ち合わせるスペクトラムな概念として捉え、他の概念との関連を検証した研究も存在する。本研究では、自己愛を誰もが持つスペクトラムな概念と捉えたうえで2種類の自己愛（誇大型自己愛と過敏型自己愛）に共通してみられる特権意識を抑制する概念と考えられるセルフ・コンパッション（特に共通の人間性）と謙虚の関連を検討し、健康な自己愛モデルを作成することを目的とした。

本研究では、関西圏の大学生・大学院生339名（男性132名、女性205名、その他2名）を対象に質問紙調査が行われた。尺度は「病理的自己愛目録短縮版尺度（川崎・小塩, 2021）、セルフ・コンパッション日本語版尺度（有光, 2014）、「日本版生き方の原則調査票」（大竹・島井・池見・宇津木・Peterson & Seligman, 2005）から、「謙虚」を構成する項目が用いられた。

自己愛とセルフ・コンパッションに有意な男女差が見られたため男女別に分析を行った。自己愛の各変数を説明変数、謙虚を目的変数とした重回帰分析を行った結果、男性において「謙虚」に対して「誇大空想」と「特権的憤怒」が負の影響、「脱価値化」が正の影響を及ぼしており、女性において「謙虚」に対して「搾取性」と「特権的憤怒」が負の影響、「自己隠蔽」が正の影響を及ぼしていた。次にセルフ・コンパッションの各変数を説明変数、謙虚を目的変数とした重回帰分析を行った結果、男性において「謙虚」に対して「孤独感」と「共通の人間性」が正の影響を及ぼしており、女性において「謙虚」に対して「共通の人間性」が負の影響を及ぼしていた。これらの結果を踏まえ、媒介分析を行った結果、男性において「誇大空想」が「謙虚」に及ぼす影響を「共通の人間性」が部分媒介しており、「特権的憤怒」が「謙虚」に及ぼす影響を「孤独感」が部分媒介していることが示された。女性においては上記の変数間における媒介効果は見受けられなかった。

分析結果より、特権意識を表す特権的憤怒が謙虚に影響を与えているという仮説は男女ともに支持されたが、共通の人間性が謙虚に影響を与えているという仮説は男性においては一部支持されたが女性においては支持されなかった。健康な自己愛モデルを作成するという目的は達成されなかったが、自己愛者への介入方法としてセルフ・コンパッションを用いる際には考慮すべき点があることが示唆された。